

# ピアノ及び電子オルガンにおける編曲法

—L. v. Beethoven のピアノ協奏曲第1番第1楽章を例にして—

The Method of Arrangement for Piano and Electronic Organ :  
—Taking an Example of the 1st Movement of  
Piano Concerto No. 1 by L. v. Beethoven—

(1995年3月31日受理)

松井みさ

Misa Matsui

Key words : 編曲、ピアノ、電子オルガン

## 1. はじめに

古来より名曲と呼ばれた数多くの曲はいろいろな演奏形態に編曲されてきた。大部分は演奏会などのために、その時々都合の良い楽器編成に編曲されたものであろうが、それとは少し性格の異なる編曲の1つとして、ピアノスコア「主として、オペラ、オラトリオ、管弦楽曲などをピアノ用に編曲した楽譜—標準音楽辞典 音楽之友社」がある。

ピアノスコアという表現が果たして適切かどうか、という議論はここではおいておくとして、現在協奏曲や、オペラのオーケストラ譜の代用として練習用に、また時には舞台上でもピアノスコアがしばしば用いられているのは事実である。そして、その編曲は、作曲者自身の手によって、もしくは後世の第3者の手によって行われているのが大部分だが、ここでは、第3者の手によって編曲されたものを研究対象とする。なぜならば、作曲者自身の手による編曲は、作曲者の意図が適確に反映されているのは当然であり、その編曲について他人がとやかく口をはさむのは作品自体の是非を問うことになりかねないからである。

一方、このピアノスコアの役割を電子オルガンで行おうという試みが、ここ数年おこっている。電子オルガンの歴史自体はまだ30数年と新しいのだが、技術の発展は目覚ましく、これからの可能性を大いに秘めている楽器である。そして、その可能性の1つとして、オーケストラ作品の演奏というのがあげられる。これは、様々な楽器の音色を出すことができる、という電子オルガンの特性を生かし、オーケストラ作品を1台、または数台の電子オルガンで演奏するというものである。こ

れを先程のピアノスコアに当てはめてみると、電子オルガンでオーケストラパートを演奏した場合、より原曲に近い効果が得られるのではないかと考えられる。しかし実際には、協奏曲のオーケストラパートを電子オルガンに編曲した楽譜というものはほとんど出版されていない。その理由としては、楽器自体がまだ日々改良されていること、この楽器の分野では、演奏者が編曲者を兼ねるのが一般的なこと、等があげられる。筆者は、作曲、編曲を専門とする者、また現在電子オルガンに携わっている者として、現在一般的に使用されている協奏曲のピアノスコアについて、またその曲を電子オルガン用に編曲することについて比較、検討を含め考察していきたい。

今回、研究対象としては、L. v. Beethoven のピアノ協奏曲第1番 Op. 15第1楽章を取り上げた。楽譜の入手が容易なこと、複数の出版社からピアノスコアが出版されていること、ピアノ独奏に対して、同じ楽器でのピアノスコアをどのように編曲しているかについても興味があること、などが主な理由である。

## 2. オーケストラ譜と各ピアノスコアとの比較、検討

まず、資料として手元に用意した楽譜を列記する。

- ① オーケストラスコア 全音楽譜出版社 ミニチュア・スコア
- ② ピアノスコア PETERS
- ③ ピアノスコア BREITKOPF
- ④ ピアノスコア SCHIRMER

の4種類である。

比較、検討する箇所としては、

- 1、オーケストラが、和声的な動きはもとより旋律的な動きをしている。
- 2、3種類のピアノスコアそれぞれ編曲が多少なりとも異なっている。
- 3、オーケストラだけが、延々と演奏されている箇所ではなく、独奏ピアノにはさまれた比較的短い、しかし第1楽章の中で重要な役割を持った部分である。

などを考慮し、154小節の3拍目より162小節の1拍目までを選んだ。

まず、オーケストラスコアを掲載しておく。(楽譜1)

この部分は、第1楽章全体から見れば、呈示部の第2主題の提示にあたり、その前の独奏ピアノによる経過句と、163小節からの独奏ピアノの第2主題との間のつなぎというオーケストラが重要な役目をはたしている箇所である。

楽譜 1

Musical score for the first system of instruments. The instruments listed are Flute (Fl.), Oboe (Ob.), Clarinet (Cl.), Bassoon (Fg.), Cor Anglais (Cor. (C)), Violin I (VI. I), Violin II (VI. II), Viola (Vla.), Violoncello (Vc.), Contrabass (Cb.), and Piano (Pf.). The score shows a complex melodic line for the Flute and Oboe, with supporting parts for the other instruments. Dynamics include *p* (piano).

Musical score for the second system of instruments, continuing the first system. The instruments listed are Flute (Fl.), Oboe (Ob.), Clarinet (Cl.), Bassoon (Fg.), Cor Anglais (Cor. (C)), Violin I (VI. I), Violin II (VI. II), Viola (Vla.), Violoncello (Vc.), Contrabass (Cb.), and Piano (Pf.). The score shows a complex melodic line for the Flute and Oboe, with supporting parts for the other instruments. Dynamics include *p* (piano).

Musical score for the third system of instruments. The instruments listed are Flute (Fl.), Oboe (Ob.), Clarinet (Cl.), Bassoon (Fg.), Violin I (VI. I), Violin II (VI. II), Viola (Vla.), Violoncello (Vc.), Contrabass (Cb.), and Piano (Pf.). The score shows a complex melodic line for the Flute and Oboe, with supporting parts for the other instruments. Dynamics include *p* (piano).

次に、前ページの楽譜1を、音高を変えずにピアノ譜（大譜表）に書き換えたものを掲載する。（楽譜2）

楽譜2

The image shows a piano score for two systems. The first system is in common time (C) and starts with a treble clef. The second system is in a key signature of one sharp (F#) and also starts with a treble clef. The score is written for piano and includes various musical notations such as notes, rests, and dynamics.

この楽譜をそのまま1人の演奏者が演奏することなど、とうてい不可能である。そこで、編曲が必要となってくる。

では、次にピアノスコアについて考察してみる。まず3社それぞれの楽譜を掲載しておく。

楽譜 3

『PETERS』

Musical score for 'PETERS'. The score is written for piano and features a 'Tutti' marking. It consists of two systems of music. The first system shows the beginning of the piece with a piano dynamic marking (*p*). The second system continues the piece with various musical notations including slurs and dynamic markings.

楽譜 4

『BREITKOPF』

Musical score for 'BREITKOPF'. This section is specifically for the first violin (Viol. I), marked with a 'p' dynamic. It shows a short melodic phrase with fingerings 1, 2, 3, and 4 indicated above the notes.

Musical score for 'BREITKOPF'. This section is for the piano accompaniment, marked with a 'Tutti' dynamic. It begins at measure 155 and includes a key signature change to D major. The score features complex rhythmic patterns and fingerings (e.g., 4, 4, 4, 3, 4, 2, 3, 4, 2) for both hands.

## 楽譜 5

## 『SCHIRMER'S』

The image displays two systems of musical notation for piano accompaniment. The first system is for Violin I (VI. I.) and Violin II (VI. II.), with dynamics markings such as 'p' and 'pp'. The second system shows a more complex piano accompaniment with various articulations and dynamics. The notation includes treble and bass clefs, notes, rests, and dynamic markings like 'p' and 'pp'. There are also some specific markings like 'R. d. #' and '5' in the second system.

これら3種のピアノスコアは当然であるが、高音部と低音部の大きな流れは同じである。しかし、音高、転回形など細かい部分に注目すると、それぞれ異なった動きをしている。

具体的に考察してみる。

まず、右手の部分であるが、Fl. と Vn. 1 の旋律を演奏している点では共通であるが、楽譜3では、Fl. の音高で演奏されているのに対し、楽譜4、5では、オクターヴ低く Vn. 1 の音高で演奏されている。この場合、高い音域の方が、音が通り、原曲（オーケストラ）の雰囲気がよく出るであろうが、他の旋律と音域的に離れてしまい、右手では、それ1本しか演奏できなくなってしまう。（楽譜3参照）そこで、楽譜4、5のように、オクターヴ低く旋律を演奏することによって、他の声部も右手で演奏しようという考えが出てくる。主旋律の効果としては、音域が低くなることによって薄れるかもしれない。しかし、内声が補えることによって音が厚くなるという効果がある。（楽譜4、5参照）

次に左手の部分を見てみる。ここでは、前半と後半で、扱いが異なっている。前半では、Vn. 2 の伴奏型を軸に、低音を加えた形で大体一致している。細かく見ると、楽譜3、4では、前半の扱いは、まったく同じであるが、楽譜5では、低音をCb. の音高に合わせようとしたため、和音の転回型を変えることによって処理している。一方、後半はそれぞれの楽譜で処理の仕方が異なっている。具体的に考察してみる。楽譜3では、低音は、忠実に再現しているが、その他の音は、Vn. 2 のリズムと和音で音をとらえているため、必ずしも原曲（オーケストラ）に忠実だとはいえない。

楽譜4では、低音を忠実に再現している点では、前と同じである。しかし、その他の声部では、8分音符のVn. 2のリズムでさえ部分的にしか用いず、木管楽器で演奏される内声を、右手の内声と合わせて補っているに過ぎない。楽譜5は、もっぱら、低音部の充実専念している。8分音符のVn. 2のリズムは、右手でかなり忠実に演奏され、そのため、他の内声の音はほとんどカットされている。

以上、3種類のピアノスコアをそれぞれに、また原曲のオーケストラ譜とも比較、検討してみたが、一通り考察した感想としては、さすがに全世界で一般的に用いられている楽譜だけあって、どのピアノスコアも原曲の持ち味を生かしつつ素晴らしい編曲をしているというものである。しかし、細かい指摘になるが、各々の楽器の横の流れとか、音域、独奏楽器（この場合はピアノ）との音の重なりなど、1台のピアノで表現するのが困難な箇所では、それぞれ工夫の跡が見られはするものの、音を捨てることに終始してしまっている感がある。

ピアノ協奏曲を研究材料に選んだ理由の1つでもある独奏ピアノとの関わりであるが、ピアノスコアに直した場合、やはりどのように編曲しても同じピアノ同士なので、音色の変化に乏しくなってしまう。聞いていて、独奏の部分かオーケストラの部分か区別が付きにくい、というのが正直な感想である。

一方、現在ほとんどの音楽ホールにはグランドピアノが備えられているだろうし、2台以上のグランドピアノを所有しているホールも多数あるだろう。名曲と呼ばれる大部分の作品は、ピアノスコアが出版されているし、入手も容易である。そう考えると、ピアノスコアを利用して2台のピアノで協奏曲を演奏するのも一つの方法として有効である。

### 3. 電子オルガンへの編曲

今までは、ピアノにおける編曲について研究、考察していたが、このオーケストラパートを電子オルガン用に編曲したらどうなるであろうか。前にも述べたように、電子オルガン用に編曲された楽譜は、まだ一般にはほとんど出版されていない状態である。したがって、筆者自身で編曲した楽譜をここに掲載しておく。(楽譜6)

筆者としては、できるだけ原曲に忠実に編曲したつもりである。電子オルガンには足鍵盤があるので、これを低音に専念させることができ、その結果、左手は伴奏と内声をとることができる。またピアノのような減衰音とは異なり、持続音がだせるので、響きを厚くすることができる。電子オルガンは、音色を重ねることができ、また楽器によってはフィート数を変化させることもできる。したがってより原曲に忠実な編曲が可能となる。筆者の編曲は、多少欲張ってしまった感があるが、一つの方法として見ていただければと思う。

## 楽譜 6

電子オルガンでの編曲は、いい事づくめのような書き方をしたが、当然問題点もある。まず、先程から何度も書いているが、楽譜の出版数が圧倒的に少ない。今の所、専門家に頼むか、自分で編曲するしか方法がない。次に、ピアノのように、統一された規格がなく、楽器メーカー、またその中でも機種により、機能も使用方法も異なり、演奏者は自分が慣れていない楽器だと戸惑ってしまう。ホールに楽器がおいてある可能性も非常に低いし、もちろん電源が必要である。



## 4. ま と め

ピアノスコアと電子オルガンスコア、楽器が異なると、編曲法もこんなに異なるものかと思った。この場合、どちらの楽器がオーケストラパートを演奏するのによりふさわしいか、ということは問題ではない。どちらも長所を持ち、短所を持っている。大切なのは、一つの考えにとらわれず、その時々に応じて最も良い方法を探ることである。

今回は、たまたまピアノ協奏曲の1曲の1部分を取り上げたにすぎない。1楽章全てとか1曲全てなどまだまだ研究不足である。さらに、他の楽器による協奏曲、オペラのヴォーカルスコアなど、研究しなければならない曲はいくらでもある。今後の課題として考えていきたい。

## 参考，引用文献・楽譜

1. 新訂 標準音楽辞典 音楽之友社
2. L. v. Beethoven ピアノ協奏曲第1番 ハ長調 作品15 オーケストラスコア 全音楽譜出版社
3. L. v. Beethoven ピアノ協奏曲第1番 ハ長調 作品15 ピアノスコア Peters
4. L. v. Beethoven ピアノ協奏曲第1番 ハ長調 作品15 ピアノスコア Breitkopf & Härtel
5. L. v. Beethoven ピアノ協奏曲第1番 ハ長調 作品15 ピアノスコア Schirmer, G., Inc.